

# フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

全国から春の便りと共に、国内旅行者をターゲットにした旅行企画情報が伝わってくる。多くが体験型や滞在型の「コトの消費」

だ。金太郎鮎を輪切りにしたように企画に類似したものが多く。厳しい観光地間の競争で、一度訪ねただけで関心が、別の観光地に移って行く事が繰り返されている。「もう一度、行ってみたい」と感じてもらうには、大北地域全体の取り組みが求められる。会津には「会津の三泣き」がある。会津に生活を始めて、会津人の取っつきにくさに泣かされ、やがて深い人情に触れて涙し、会津を去るとき、情の深さに三度目の涙をこぼす、の意味だ。訪れた人達が土地柄、人柄に

ほれ込んでくれる観光産業の基盤が、行政や観光事業者の取り組みだけでは無い。誘客対象の年代は大幅に広がっている。従前の知恵だけでなく、幅広い年代からの知恵の結集が課題なのだろう。

## コロナ禍で疲弊する心に伝わる文化が求められている

新型コロナウイルスの影響で、家庭など限られた生活空間で時間を費やす人が多い。そのため、青春時代を懐かしむ中高年はもちろん、若い世代でも「昭和歌謡」が見直され、ひそかなブームになっている。今の曲の多くはサウンド重視だが、昭和歌謡は詩の世界感と曲が一体となって、シンプルでも強い昭和のメロディーは、新型コロナウイルスで疲弊する私たちの心に、じわり伝わってくるの

添うように語りかけ、最後の曲「さよならの向こう側」のためだけに純白のドレスを身にまとった百恵さんが、握りしめていた白いマイクをそっとステージに置いた、懐かしさが胸を打った。改めて、当時の作詞家の素晴らしさが理解



安曇野市穂高の水田のコハクチョウ、食欲旺盛な姿は見応え十分

できた。歌は、歌詞が本音で書かれているのだろう。言葉と言葉の間とか、余白が感じられ、創造力を掻き立てられた。今のポップの作り手の中から、昭和歌謡のような作詞能力が伝わってくる作詞家の逸材の誕生を期待したいものだ。(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)